

べっふの文化財

No.44

平成 26 年 3 月

— 石垣原合戦 —

「如水といふ良将の下にて、久野・井上・野村など、いつれも名高き勇士と、敵方にハ吉弘・宗像など、さずが音に聞こえし騎武の輩出合て、勝負を決し戦なればにや。此軍の事およそ天が下にかくれなく、後代まで世の人美談とする所なり」

『黒田家譜』



吉弘統幸（宝泉寺蔵）

目次

はじめに	1
豊臣政権と関ヶ原合戦までの動き	2
細川領・豊後国速見郡の情勢	2
松井康之列書状案に見る豊後の情勢	4
松井康之・有吉立行連署状案から見る石垣原合戦	6
貝原益軒が記した石垣原合戦	8
大友義統衆討死交名	10
加藤清正と石垣原合戦	11
黒田如水と石垣原合戦	12
吉弘統幸と石垣原合戦	13
『鶴見七湯廻記』に描かれた石垣原合戦	14
古絵図で見る石垣原合戦	16
古写真で見る石垣原合戦	17
踊り継がれる石垣原合戦	18

はじめに

慶長5年（1600）旧暦9月、別府の扇状地を舞台に黒田如水と大友義統の軍勢による合戦が行われました。石垣原合戦と呼ばれるこの戦いは、9月13日に両軍が衝突、15日に大友義統が降伏して終結します。同日、美濃関ヶ原では徳川家康が率いる軍勢と毛利輝元を総大将とする石田三成らの軍勢が衝突した関ヶ原合戦が行われ、徳川方が勝利します。中央の政治から遠く離れた別府の地で行われた石垣原合戦も豊臣政権の内部分裂から派生する対立と深く関連し、細川忠興の領地であったこの地を巡る徳川方と毛利・石田方のせめぎ合いの終結点として、黒田如水と大友義統が石垣原の地で対峙する構図が生まれてきます。

本書では、数ある石垣原合戦に関する資料の内、武将間で交わされた書状や福岡藩黒田家の記録である『黒田家譜』を参考に石垣原合戦が行われた背景や合戦の様子を探ることを目的としています。



- ① 実相寺山
- ② 加来殿山
- ③ 松井康之陣所跡
- ④ 犬の馬場
- ⑤ 大友義統本陣跡
- ⑥ 宗像掃部墓
- ⑦ 宗像掃部陣所跡
- ⑧ 吉弘統幸陣所跡
- ⑨ セツ石
- ⑩ 石垣原古戦場跡の碑
- ⑪ 南立石公園
- ⑫ 吉弘統幸墓

実相寺山山頂からの眺望



鶴見岳

扇山

加来殿山

南立石公園

宗像掃部墓

宗像掃部陣所跡

大友義統本陣跡

松井康之陣所跡

犬の馬場

セツ石
吉弘嘉兵衛統幸陣所跡



吉弘統幸墓



大友義統本陣跡



セツ石



吉弘嘉兵衛統幸陣所跡



古戦場橋と南立石公園

豊臣政権と関ヶ原合戦までの動き

豊臣秀吉の朝鮮出兵

国内の統一を果たした豊臣秀吉は、文禄・慶長年間に2度にわたる朝鮮出兵を行う。この2度の出兵は、作戦面の対立や論功行賞の不平等などの理由で豊臣家家臣団に軋轢を生む結果となり、黒田長政・加藤清正ら武功派と石田三成ら吏僚派が対立し、関ヶ原合戦の要因となった。

文禄の役の際、豊後国主であった大友義統も出兵の命を受け、黒田長政の軍勢と共に渡海するが、明軍に包囲された小西行長の援軍要請に応じず撤退し、豊臣秀吉の怒りを買うことになる。文禄2年（1593）5月、大友義統は領国の豊後を没収され、毛利輝元のもとに幽閉された。大友家が退いた豊後には、熊谷直盛・中川秀成ら豊臣家の家臣団が配属されることになった。

豊臣秀吉の死と徳川家康の台頭

慶長3年（1598）8月18日、豊臣秀吉が死去すると幼少の秀頼が豊臣家の家督を継いだ。豊臣秀吉は死の直前、五大老・五奉行の制度を採用し、有力大名による合議制で政権の運営を行い、幼い豊臣秀頼を補佐する役割を与えた。慶長4年（1599）閏3月、豊臣秀頼の後見人で、徳川家康に並ぶ実力者であった前田利家が没すると政権のバランスが崩れ、前田利家の死の翌日には、黒田長政・細川忠興ら武功派が石田三成を襲撃する事件が起きた。徳川家康の斡旋により事態は收拾されたが、石田三成は奉行職を解かれ、政権の中樞から外れた。また、五大老のうち、毛利輝元・上杉景勝・宇喜多秀家・前田利長が国元に帰国すると、唯一上方に残った徳川家康が豊臣政権の実権を握ることになる。

慶長5年（1600）の動向

慶長5年（1600）2月、徳川家康の勧めにより細川忠興に、別府の地を含む豊後速見郡および由布院6万石が与えられた。6月には、上洛を拒み続ける上杉景勝に謀反の疑いがあるとして、徳川家康自らが総大将となり上杉景勝を攻めるべく会津征伐軍が編成され上方を出発した。会津征伐の軍勢が、関東まで進んだ7月中旬、石田三成を中心とした反徳川勢力が決起、毛利輝元を総大将として大坂城西の丸に迎え入れ、増田長盛ら奉行衆もこれに同調した。また、各地の大名に徳川家康を弾劾する「内府ちがひの条々」を發し上洛を求めた。7月19日には徳川家康の上方での拠点伏見城を攻撃、細川忠興の領国丹後も攻撃の対象とされ、父細川幽斎が田辺城で籠城戦を行う。これにより徳川家康が率いる軍勢は会津征伐を中止、反転し上方へ向かうことになり、毛利・石田方の軍勢と美濃関ヶ原で対峙した。

細川領・豊後国速見郡の情勢

石垣原合戦の舞台となる別府の地は、慶長5年（1600）2月に細川忠興の領地となり、木付城には細川家の重臣松井康之と有吉立行が在城していた。石田三成らが決起した後、木付城の松井康之のもとには、7月下旬から8月上旬にかけて大坂の奉行衆などから、毛利・石田方に味方するよう勧誘の書状が届く。8月中旬には毛利・石田方の命を受けた白杵の太田氏による開城の交渉が行われるが失敗に終わる。これらの木付城明け渡しの工作が失敗に終わると毛利・石田方は、幽閉を解かれ上洛していた旧豊後国主大友義統に武器などを提供し、豊後へと向かわせる。9月9日に別府浜脇浦に上陸した大友義統は立石村に布陣し、9月10日には木付城に兵を差し向けるが、翌11日撤退する。木付城の救援に向かった黒田勢と木付城の軍勢が、実相寺山付近に布陣し、立石村の大友勢と対峙することにより石垣原合戦が行われることになる。

上方の動静	豊後の動静
慶長3年（1598）	文禄2年（1593）
8月18日 ●豊臣秀吉没	5月1日 ●大友義統は豊後除国
慶長4年（1599）	慶長4年（1599）
1月 ●豊臣秀頼が大坂城へ移る 1月21日 ●前田利家ら豊臣家大老及び奉行衆が、徳川家康へ伊達政宗らとの縁組を糾弾 閏3月3日 ●前田利家没 閏3月4日 ●黒田長政・加藤清正ら七将が石田三成襲撃を企て、石田三成は伏見へと逃げ込む ●徳川家康が石田三成を佐和山城に蟄居させる 9月 ●上杉景勝が領国の会津へ帰国	閏3月 ●大友義統の幽閉が解かれる、義統は息子能乗が居る江戸牛込に移る 6月18日 ●大友義統は上洛のため江戸を出発
慶長5年（1600）	慶長5年（1600）
2月 ●上杉景勝が領国内の城を普請 4月1日 ●徳川家康は上杉景勝へ上洛を求める 6月16日 ●徳川家康は会津討伐のため大坂を発す 7月11日 ●石田三成・大谷吉継が決起 7月17日 ●毛利輝元が大坂城に入る 徳川家康を弾劾する「内府ちがひの条々」が全国の大名に送られる ●毛利・石田方は諸大名の妻子を人質として収監しようとするが、細川忠興の妻ガラシャはこれを拒み自害する 7月18日 ●丹波・但馬の毛利・石田方は、細川幽斎の丹後田辺城攻略に向かう 7月19日 ●毛利・石田方の宇喜多・島津・小早川らが、徳川方の伏見城を囲む 7月下旬 ●徳川家康は会津征伐を中止し、黒田長政・福島正則らの軍勢は上方へ引き返す 8月1日 ●伏見城陥落 8月23日 ●徳川方の黒田長政・福島正則らの攻撃により、毛利・石田方の岐阜城が陥落 9月1日 ●徳川家康が江戸を出発 9月11日 ●徳川家康が清洲城に到着 9月13日 ●細川幽斎が籠城していた田辺城が開城 9月15日 ●関ヶ原合戦が起こり、徳川方が勝利 9月25日 ●毛利輝元が大坂城を退去 9月27日 ●徳川家康が大坂城に入る 10月1日 ●石田三成・小西行長・安国寺恵瓊、京都六条河原で処刑	2月 ●細川忠興が徳川家康の進めにより豊後速見郡を与えられる 3月中旬 ●細川忠興が木付城へ入り、領国を巡見 黒田領佐田にて黒田如水と会談 4月29日 ●細川忠興が丹後へ帰国 7月23日 ●木付城の松井康之のもとへ「内府ちがひの条々」が届く 8月13日 ●白杵城の太田一成の使者が、城明け渡しを求めて木付城へ訪れる 8月中旬頃 ●毛利輝元が大友義統に西軍加担を要請し、義統はこれを承諾し人質を出す 8月下旬頃 ●大友義統、上関まで到着 9月9日 ●大友義統、浜脇浦より上陸し立石に布陣 9月10日 ●大友方が木付城を攻める 9月13日 ●石垣原合戦が行われ、黒田方勝利 9月15日 ●大友義統が降伏 9月17日 ●加藤清正は、玖珠郡引治村にて石垣原合戦の終結を知り、熊本へ引き返す
慶長8年（1603）	慶長6年（1601）
2月12日 ●徳川家康は朝廷から征夷大將軍に任じられ江戸幕府を開く	10月 ●豊後国速見・国東郡、約二万五千石の領地が松井康之に与えられる

松井康之列書状案に見る豊後の情勢（松井文書）

まつい やすゆきれつしよじょうあん
 「松井康之列書状案」は、当時木付城に在城していた細川家の重臣松井康之が、本国の丹後に木付城を取り巻く情勢について知らせた書状であり、石垣原合戦が行われる直前の8月28日付で記されたものである。別府の地を含む豊後国速見郡は豊後国内で唯一、徳川家康に味方することを鮮明にしていた細川忠興の領地であり、その拠点である木付城に在城していた松井康之のもとには、大坂の奉行衆らから毛利・石田方へ味方するよう書状が届いていた。8月に入ると毛利・石田方は白杵城の太田一成に木付城の請取りを命じ木付城へ向かわせるが、松井康之は城の明け渡しを拒絶する。太田氏による城請取りが失敗に終わると、毛利・石田方は、幽閉を解かれ上方にいたとされる旧豊後国主大友義統に武器等を提供し、豊後へと向かわせることになる。

(1) 毛利・石田方からの使者

まへ だげん い なつかまさいえ おおた かずよし
 毛利輝元・宇喜多秀家・三奉行（前田玄以・長束正家・増田長盛）らの使者として、白杵城主太田一吉の息子、太田一成が木付城請取りを命じられ豊後へ帰国した。太田一成は帰国後、使者に毛利輝元らの書状を持たせ木付城に向かわせたが、木付城の松井康之は書状を投げ返し、重ねて使者を送ってくるようであれば討ち捨てにすると告げ、城の明け渡しを拒絶した。



松井康之列書状案（慶長五年八月二十八日付）

- 【釈文】（前略）
- (1) 輝元・備中納言殿・三奉行・石田少大形少の使者として、太田美作うすきへ罷下、右各を被對松井、折辱もたせ候て、作州一札、佐渡・四良右衛門兩人へ宛所にて使者差越、当城相渡候やうにと、色々様々被申様二候、各一途二存切在之条、別二御返事無之候、然上ハ、御状共此方二留置不入由候て、一通も不残なけ返し、重而人ヲ被越候ハ、討捨可申由申放、使返し申候事、
 - (2) 太田飛騨・美作親子、舟共相催、深江之古城へ夜籠二舟を着、足懸可柁旨申由候間、本丸・二丸まで念を入、引破申候、（中略）
 - (3) 大伴よしむねへ当郡之義奉行衆を進之、中国まで被下候由候、うすき・府内・熊谷城・垣見城四ヶ所之内へ被着、当郡へ之行可仕と存候、在々人質、弥、丈夫二相メ申候、（中略）
 - (4) 如色々々様々御心付、大筒も三丁御いれ候、先度舟にて御出候て、被成御見廻候、城無越度やう相抱候へハ、何時も可有後巻由、頼敷被仰やう、申計無御座候事、
 - (5) 主計殿、追々人を被下、御懇共二候、兵糧、府内にて御かり候て、式百石計被入候、玉葉五千放被下候、何程成共申次第、可被指籠旨候、御念入候段、書中二不被申上候事、（中略）
 - (6) 一加主御女中盗出、一昨日廿六中津下着、昨日隈もとへ御送之由、如方申来候、珍重無申計候事、竹豆州八煩と候て、今二不被上候、当城へ一段懇にて御座候事、早主馬、丹後へ被立由候へ共、内右衛門一段無疎略、万事心付にて御座候事、一毛民太も丹後へ被立由候、是も留守居ハ当城へ申通候事、
 - (7) 中修理、今二不被上候、四五日以前、平右衛門被上候、妻子新駿へ奉行衆被預候故、あいしらいと聞へ申候事、
 - (8) 毛老、去十八日罷下、隈本へ被越旨候、輝元奉行衆を〇使として被下由候、今度伏見にて森九左衛門・同勘左衛門・其外数多致討死候、家中よハリ無正躰旨候、如ハ人数被集、何れへ成共働構にて候条、（中略）
- 八月廿八日 各
 加々山少右衛門殿
 牧 新五殿

引用文献：林千寿編1998『松井文庫所蔵古文書調査報告書三』八代市立博物館未来の森ミュージアム

(2) 太田氏による木付城請取りの失敗

説得による木付城の請取りが困難と判断した太田一吉・一成親子は、城請取りの足掛かりとして、木付城に近接する深江の古城に入るため舟を出してきたが、事前にこの動きを察知した木付城側は、深江城の本丸・二ノ丸を崩してこの動きを封じた。

(3) 大友義統の動向

「当郡の儀、奉行衆より進之、中国まで被下候由候」とあり、公儀の奉行衆より旧豊後国主大友義統に豊後国速見郡が与えられ（白峰2011b）、中国辺りまで下って来ていることが報告されている。松井康之は大友義統が、白杵・府内・熊谷城（安岐城）・垣見城（富来城）に入り当郡（木付城）への行動を起こすだろうと予測していた。これに対応するため、領内の農民等から人質を取り、領民が大友軍へ加わらないようにしている。

(4) 黒田如水との連携

黒田如水との連携が語られており、大筒3丁の提供を受けている。「先度舟にて御出候て、御見廻候」とあるように、黒田如水が木付城に来て、城の普請の様子を見廻ったと伝えている。また、木付城が攻められた際には、黒田如水から後巻（救援）が行われる約束があることが判る。

(5) 加藤清正との連携

肥後の加藤清正とは頻りに書状を交わし、加藤清正の手配により兵糧200石を府内から城に入れ、鉄砲の玉薬5000発の提供を受けている。また、加藤清正の妻が黒田如水の手配で中津を經由し熊本へ帰国した旨も伝えており、黒田如水と加藤清正の連携の様子も伺える。

(6) 豊後の動静

高田城竹中重利は病と称して上洛はしておらず、木付城とも懇意にしている。

府内城の早川長敏や日隈城の毛利高政は毛利・石田方の要請で丹後へ出陣したが、留守居は木付城と連絡があることがわかる。

岡城の中川秀成は上洛していないが、4・5日前に家臣の中川平右衛門が上方へ向かったと伝えている。

(7) 豊前の動静

小倉城の毛利吉成は、毛利輝元および奉行衆の加藤清正への使者として8月18日に帰国している。毛利吉成の軍勢は伏見城攻めに加わり、重臣多数を失っており、小倉や門司の城も毛利吉成の勢力では支えることはできず、毛利輝元の軍勢が入るだろうと予測している。また「如ハ人数被集、何れへ成共働構にて候条」とあるように黒田如水が中津に於いて兵を集め、どの方向へも出陣する用意があることを伝えている。



松井康之・有吉立行連署状案から見る石垣原合戦(松井文書)

「まつい やすゆき 松井康之・ありよしたてゆきれんしよじょうあん 有吉立行連署状案」は、石垣原合戦が終結した直後の9月19日付で記されたもので、木付勢を引き連れて合戦に参加した松井康之・有吉立行が、本国に合戦の様子を報告した書状(案)である。この書状には、石垣原合戦に参加した黒田方の軍勢および兵士数が記されている。また、合戦の開始や黒田勢の先手が深入りして、4人の大将の内2人が討死した様子、井上九郎右衛門率いる二番備が参戦し、大友勢を立石の陣まで押し込む状況など戦況が詳しく記されている。実際に合戦に参加した武将による戦況の報告であり、石垣原合戦を検討するうえで貴重な資料である。



松井康之・有吉立行連署状案(慶長五年九月十九日付)

- 【釈文】 (前略)
- 一 如(黒田如水)水、懸樋城を取巻候て御座候
 処へ、右之注進候て、彼表被引拂
 同十三日立石表へ御働候、先手
 久次右衛門・曾我五右衛門・
 母里与三兵へ・時枝平大夫、
 此四頭、千余一そなへ、二たんぬ
 井上九良右衛門・野村市右衛門・
 後藤又兵衛息、此三頭、千余、
 木付之者先を仕、立石が三十
 町計北、靄見之内十さうし山へ
 打あげ申処二、敵少鉄炮之者
 出し候へハ、先そなへ四人之衆かぶか
 れ、九良右衛門組一里も跡二候て、人数
 不統候処二、馬を乗出し、のほり
 迄引おろし、被遂一戦候、此方ヨリ
 者、無了簡打おらし申内二、はや
 かつり申候条、馬がおりあひかゝり二
 鎧を入、数刻相たゝかい、手下
 にて切あひ、つきあい討取申、首
 注文御披見として進上候事、
- (1)
- (2)
- (3)
- (4)
- (5)
- (6)
- (7)
- (8)
- (9)
- (10)
- (11)
- (12)
- 右之かぶき衆絶二馬がおりす
 候て、此方 鎧二つき
 かち候てから馬を入申候処二、立石きわ
 にて取り返し、久次右衛門・曾我五右衛門
 四人之大将之内一相果候条、
 討死、○惣敗軍二成、もとの十相寺山
 を過候てにけ申候、兩人馬がおり
 討死二相極、踏こたえ申志之者共
 あつまり、敵追しらミ、こたえあい
 申所へ、二番そなへの井上九良右衛門・
 野村市右衛門被参、鎧を入、数刻
 たゝかい、つき勝、又立石迄追籠
 申候、
 無非類働にて御座候、
 両度之合戦二宗像掃部・吉廣
 加兵衛・其外歴々八十余討取、
 鎧をも指出程之者ハ相果申
 候条、
 可被責殺二相極候処、
 吉統 母多兵陣所へ走
 入へく候条、諸卒たすけられ候様
 にと懇望二付○中津へ送被遣候事、(中略)
- 九月十九日 康之
 立行
 米田助右衛門殿
 加、山少右衛門殿

引用文献：林千寿編1998『松井文庫所蔵古文書調査報告書三』八代市立博物館未来の森ミュージアム

(1) 黒田方の軍勢

木付城からの知らせにより黒田如水が救援のために向かわせた黒田方の先勢で、9月13日の石垣原合戦に参加した黒田方の軍勢の備が記されている。

黒田勢の先手は、久野次左衛門・曾我部五郎右衛門・母里與三兵衛・時枝平太夫の四大将で、兵士数は千名(①)。

二番備は井上九郎右衛門・野村市右衛門・後藤又兵衛息の三大将で、兵士数は千名とあり(②)、9月13日の合戦に参加した黒田勢の兵士数は二千名程度であったことがわかる。

「松井康之・有吉立行連署状案」
に記載された黒田軍の軍勢

先手	久野次左衛門 曾我部五郎右衛門 母里與三兵衛 時枝平太夫 「此四頭、千余一そなえ」
二番備	井上九郎右衛門 野村市右衛門 後藤又兵衛息 「此三頭、千余」

(2) 合戦の開始

木付城から大友方の布陣する立石に向かう際に「木付之者先を仕」という表現には、細川領である別府の地に侵入した大友勢に対して、少数の兵ながらも自らの敵であるという意味がうかがえる(③)。

合戦の開始は、木付勢が実相寺山に布陣した時に、大友方が「敵少鉄炮之者」を繰り出してきて(④)、黒田勢の先手の四大将が反応し「九良右衛門組一里も跡二候て、人数不続候処二、馬を乗出し」とあるように、二番備が実相寺山周辺に布陣する前に、大友勢との合戦に及んだ様子がうかがえる(⑤)。また、松井康之ら木付勢も黒田勢が戦いを開始したため、戦いに加わっている。

(3) 大友勢の反撃

大友勢が引いたので、黒田勢はこれを追いかけて「立石きわ」まで来たところで、反撃を受け、黒田勢先手の四大将のうち久野次左衛門と曾我部五郎右衛門が討死した(⑦)。

時枝平太夫と母里與三兵衛は、実相寺山を過ぎて逃げ敗走している(⑧)。

(4) 黒田方二番備井上九郎右衛門隊の参戦

黒田勢が敗走する中、松井康之ら木付勢は「討死二相極」で、その場に踏みとどまり戦っていたところ(⑨)、黒田勢の二番備井上九郎右衛門・野村市右衛門が参戦して、数刻戦い、突き勝ち、大友勢を立石まで押し込み、この日の合戦に勝利した(⑩)。

(5) 石垣原合戦の終結

両度の合戦で、黒田勢及び木付勢は、大友方の吉弘統幸・宗像掃部ら80名余を討取り(⑪)、立石の陣に引いた大友義統に対しては軍議により「可被責殺二相極候」と決めて攻め込む用意をしていたところに(⑫)、大友義統は妹婿である母里太兵衛の陣所へ下ったため命は助け(⑬)、義統を中津へと送り石垣原合戦は終結した。

この書状によると、戦いは木付勢および黒田勢の先手が実相寺山付近に到着後まもなく始り、黒田勢の二番備は石垣原に布陣していなかった。黒田勢の先手は、大友勢が引いたためこれを追い「立石きわ」まで迫ったときに反撃を受け、久野・曾我部ら有力武将を失い、時枝・母里も実相寺山を過ぎて撤退した。このように合戦の前半においては大友方が優勢であったが、兵士数で勝る黒田勢は、二番備の井上九郎右衛門らが参戦することにより形勢が逆転、吉弘統幸・宗像掃部ら大友方の有力武将が討取られ、合戦の勝敗が決する形となった。

貝原益軒が記した石垣原合戦

かいばらえきけん じゆかく かんぶん くるだみつゆき
 貝原益軒は福岡藩の儒学者で、寛文11年（1671）に藩主黒田光之から藩祖如水と初代長政の事績を
 しゅうろく へんさん ほうえい
 集録する『黒田家譜』の編纂を命じられた。『黒田家譜』は、如水・長政の生涯の記録が全15巻（宝永本）
 にまとめられている。このうち第12巻が「如水豊後陣上」として石垣原合戦の詳細が記され、第13巻「如
 水豊後陣下」にも黒田如水の夷相寺山着陣や大友義統が降伏した様子が記録されている。また、貝原益
 軒は石垣原合戦の取材として合戦が行われた別府の地を訪れており、絵師に合戦の見取り図を描かせた
 『豊後国速見郡石垣原図』が残されており、合戦の様子を今に伝えている。



以下、『黒田家譜』から抜粋

（1） 合戦の開始

（大友方は）吉弘加兵衛統幸を大将として、竹田津志摩・小田原又左衛門・深栖七右衛門・木部山城・大神賢助・清田民部など云者、立石を打立て此方へ寄来り、石垣原にて對陣す。身方の先陣、時枝平太夫・母里與三兵衛かけ合せ戦ひしが、敵わざと引退て身方を引よせける。

（2） 大友勢の反撃

母里・時枝敵の偽て逃げるをバシらずして、追懸立石の方へゆく所に、小川の有ける河原を隔て、敵備を立直し取て返す。其時敵身方がひににらミ合て立留る。敵河原の面に、左右と中と三備に立たり。暫有て左右の備皆中備に加り、三備一になりぬ。いかさま敵の備立の様、かゝりて軍すべき物色也と見る處に、案の如く敵一度に咄と突かゝる。

（3） 黒田勢一陣の敗戦

母里與三兵衛・時枝平太夫もしばし支へて戦けるが、吉弘が猛兵に押立られ、力及はず北をさして引退く。敵勝に乗て石垣原の北の末なる野山の間、犬の馬場と云所まで追討にする程に、身方に討るゝ者多かりけり。（中略）此時身方の兵討るゝ者八十人、敵は十騎討れける。

(4) 黒田勢二陣大将、久野次左衛門の討死

二陣久野次左衛門、曾我部五右衛門、其外如水より相添られし士共と同じくかゝりけるが、母里時枝が東の方を引退くを見て、守返させんとて馬を乗よせ、返せ返せと制しけれとも、引立たる勢なれば、先陣ハ終に返さず。次左衛門ハ敵の二陣に向ひける。敵の二陣は宗像掃部を大将として、五百許にて馳かゝる。(中略)(久野次左衛門は)猶敵陣へ馳かゝり、馬よりおり立小膝を折て鎗をかまへ敵を待うけ、向ふてかゝる者を討取、数人に手を負せ、勇気を振ふ事甚盛なり。されども敵大勢なれば叶はずして、(久野)次左衛門は終に討れにける。生年十九歳とぞ聞へし。

(5) 黒田勢の三陣大将井上九郎右衛門、加来殿山より戦況を見る

(黒田勢の)三陣は、井上九郎右衛門・野村市右衛門・後藤左門なり。此三人は、石垣原の北、實相寺山の西なる加来殿山といへる山の上に、陣をとりて居たり。(中略)高き所よりつくづくと見れば、先手打まけ、二陣も破れ、松井・有吉も、本の陣所へ引上りける。敵共ハ芝原に坐して、扇をつかひ休ミ居たり。井上是を見て、よき時節そおもひ、再拜を以て身方の勢を招き

(6) 黒田勢三陣の参戦

はしめハ敵身方しばし弓鐵炮を打合しが、やがてたがひに鎗を揃へてつき合たゝき合ける。(中略)大友が先手の兵いさミ進ミけるを、身方つよく防きて突崩す。逃るを追はんとしけるを、井上・野村思ひけるは、只今敗軍せし敵の先勢ハ、此比俄に馳集たる葉武者共なり。倔強の兵ハ跡にひかへ、今日を限に必死にきハめ、最後の戦と思ひ定め、備を乱さずしづまり返て居ると見たり。

(7) 吉弘統幸と黒田勢三陣の戦い

吉弘加兵衛是を見て、敵軽々しく足を乱し追かけば、近々と引付討取へしと思ひしに、さても物馴たる者共かな。此上は今日討死ぞと究め、いざや懸らん(中略)敵進ミ来りしかば、井上・野村、爰を専途と防ぎ戦ふ。されとも吉弘いさミ戦へは、敵つよくして、井上が一手はかりにてハ、猶あやうかりける。

(8) 吉弘統幸と井上九郎右衛門との一騎打ち

吉弘加兵衛ハ、世に聞えし大剛の者、殊に抜群にたけ高く大力なりしが、朱柄の大鎗を取のべ、むかふ敵を横打に打倒し、あたりを拂て見えたりけるが、井上九郎右衛門を目かけ、鎗を打振て眞一文字にかゝり、井上殿か珍しく候。吉弘加兵衛にて候。尋常に参會すべしとて、しづしづと近付ける(中略)此所石垣原の南北の半より、四町ばかり南、立石の方によりて、野中に忠内が堀とて、わざとほりたるごとくなるから堀あり。(中略)其所に吉弘ハ南の岸の上にたち、井上ハ北の岸の上に立て相向ふ。

(9) 黒田如水の実相寺山着陣と大友義統の降伏

其日の晩景に及て、如水實相寺山に着て、山上に陣を取給ふ。先手二陣左右の備後備、一勢一勢引分て備え立陣を取。(中略)翌日(十四日)實相寺山にて、昨日打取し敵の首實検せらる。

(中略)義統剃髪姿と成て、主従十人許にて、十五日の早天に、ひそかに(母里)太兵衛か陣屋へぞ降られける。

大友義統衆討死交名（松井文書）

「大友義統衆討死交名」は、合戦当時木付城に在城していた松井康之・有吉立行が、主君細川忠興に石垣原合戦の結果を報告するために記したものであり、この合戦で討死した大友方の武将54人の名が記されている。

『黒田家譜』には、9月14日に実相寺山にて首実検が行われ、その後「別府といふ村の西の野に、かぶと付をは上の段に、雑兵の首をは下の段に、二筋にかけならへたり」と記されている。

筆頭の吉弘加兵衛（統幸）は、地元の人々によって手厚く葬られた。宗像掃部は、大友家の豊後除国後、岡城の中川秀成に属していたが、大友義統が帰国すると、同じく中川家に属していた田原紹忍とともに旧主君の軍勢に加わった。『黒田家譜』では大友方の第2陣の大将であったと伝えられている。

岐部左近と竹田津志摩は、豊後除国後も大友義統への忠誠を誓った起証文が残されている。

柴田治右衛門および平林津介は9月10日の木付城攻めの際にも討死した。



吉弘統幸墓（昭和四十五年頃）



大友義統衆討死交名（慶長五年九月十五日付）



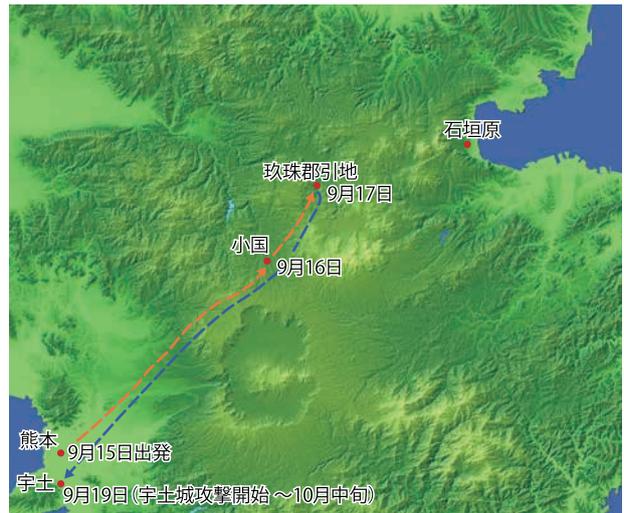
【釈文】	義統ノ衆討死分
久光道有	吉弘加兵衛
山下豊前	宗像掃部
大津る主馬	木邊左今
胡广津る与七	竹田津志麻
久我統治	豊饒弾正
じやうごノ覚内	清田味左衛門
中村左京	豊饒新助
同 三郎	上野六郎
長松新左衛門	原田舎人
小木兵庫	深津七右衛門
板井五右衛門	下郡治部
石懸半介	今村喜介
胡广津る左近	同 弾助
覚蔵坊	富来兵内
甲斐新八	吉良傳右衛門
石懸六助	原田勘右衛門
かすや内介	田尻吉蔵
白杵九兵衛	市川喜介
市川喜介	伴 覚右衛門
白杵忠右衛門	小田原又左衛門
曾我衆右衛門	市川二郎作
川野兵介	永富九郎
川野傳兵衛	原田勝六
板井宗介	橋本加右衛門
上田七内	原田休傳
都合五拾四人かしらふん	深津かに介
右之外、かしらふんの者	野上平介
ておい八十人計御	柴田治右衛門
座候由候、	平林津介
	秋岡式部
	九月十五日

引用文献：林千寿編1998『松井文庫所蔵古文書調査報告書三』八代市立博物館未来の森ミュージアム

加藤清正と石垣原合戦(松井文書)

肥後の加藤清正是、大友義統が別府に上陸したという報告を聞くと、事前の約束の通り豊後に向けて出陣した。9月16日付の書状では、15日に熊本を出発、16日には小国まで進軍し(①)、先遣隊は清正の本隊から2・3里先を行っていることがわかる(②)。また、味方となる旨を誓っていたとされる田原紹忍・宗像掃部の裏切りに対する憤りも感じられる(③)。

9月17日付の書状では、玖珠郡引地村まで進軍し(④)、そこで合戦の勝利を知り、立石(石垣原)まで行って黒田如水などに会いたいが、肥後における毛利・石田方の宇土城(小西行长居城)攻めを行うため帰国する旨を伝えている(⑤)。



加藤清正の進軍ルート

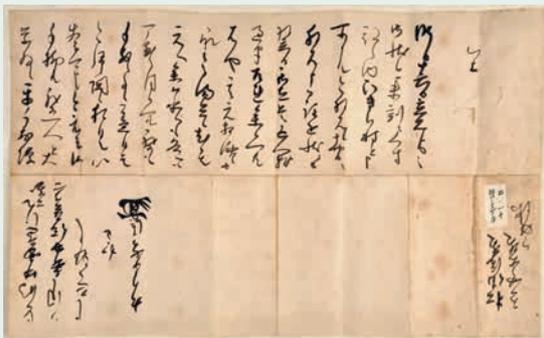
加藤清正書状

(慶長五年九月十八日付)

【釈文】

一十三日二、吉統陳所へ
如水被取懸候之処二、
其先勢より以前二被
及一戦之由、如水が
被仰越候、御粉骨可申
やう無之候、御注進承かけに、
① 昨日熊本を罷立、
今日、小国迄着陳候、
② 先勢之者ハ、是より
式三里さきに陣
取之由候、(中略)
③ 一吉統事ハ不及是非、
紹忍・掃部首を者
我々ものに討捕せ
申度候、さりとして、
此中之表裏、重々之
誓昏在之事、不及
是非候、(中略)

九月十六日 清正 (花押)
加主計
松井佐渡殿
有吉四良右衛門殿



▲9月17日付 加藤清正書状



▲9月16日付 加藤清正書状

加藤清正書状

(慶長五年九月十七日付)

【釈文】

昨日十六日立石之
御状、今未刻二、くす
郡之内ひきち村と申
所にて令拜見候、十四日二
拜見申御注進状二而、
翌日罷立、是迄人数
過半召連参候へ共、
はや、其元相濟候由
承、令満足候、尤、其
元へ参、如水へも各へも
可懸御目候へ共、我等も
手前之事候間、急、自是
令帰国候、猶、具以
使者可申候、今度者、御
手柄共我等一人と大
慶存候、互、手前隙
を明、中国邊にて可懸
御目候、(中略)

九月十七日 清正 (花押)
加主
松井佐渡殿
有吉四良右殿

黒田如水と石垣原合戦

慶長5年、中津城にいた黒田如水の様子を『黒田家譜』では以下のように伝えている。如水は上方において騒乱があることを想定し、大坂・備後の鞆・周防の上関に船を用意し、情報を収集していた。上方での異変の報が届くと中津城の普請を止めて、蓄えていた金銀を与えて兵を募り「都合三千六百餘人」を集めて合戦に備えた。大友義統が大坂より周防の上関まで来た際には使者を出し、徳川方に味方するよう説得するものの返答を得られず、大友義統が帰国し旧家臣団が多く集まり勢いがつく前に討取るべく、9月9日に豊後へ向けて出陣した。

9月10日夜、国東半島の赤根峠で木付城が大友勢から攻められたという報を聞くと、井上九郎右衛門・久野次左衛門らを木付城の救援のため派遣した。11日には富来城、12日には安岐城を囲むものの、大友義統が旧臣などを集めて勢いづく前に攻め滅ぼすため、これらの城を陥落させることなく通過した。

木付城に向かった先遣隊は木付城に着くが、すでに大友勢は撤退しており、戦う敵を失った黒田勢の先遣隊は大友義統が本陣を敷く立石に向かって進軍、13日に石垣原で激しい合戦が行われた。如水は13日の合戦の勝利を頭成（日出町）にて聞き、夕方すぎ実相寺山頂に布陣した。14日には実相寺山にて首実検を行い、15日には大友義統が降伏し、石垣原合戦は終結する。16日には熊谷直盛の安岐城を包囲し、その後、九州における毛利・石田方の諸城を攻略していった。



黒田如水（大分県立歴史博物館）



『黒田家譜』に記された黒田軍の進軍ルート

- 1番 母里太兵衛
 - 2番 黒田兵庫助・凶書助
 - 3番 栗山四郎右衛門
黒田五郎右衛門
 - 4番 井上九郎右衛門
 - 5番 野村市右衛門
後藤左門
 - 6番 母里與三兵衛
時枝平大夫
 - 7番 久野次左衛門
曾我部五右衛門
池田九郎兵衛
黒田安大夫
- 本陣 黒田如水

4番から7番までが木付城へ救援に向かった。この軍勢がそのまま別府に向かい、9月13日に大友勢と石垣原にて合戦を行う。

中津城から出陣した黒田如水の軍勢

黒田如水とともに中津城から出陣した武将は、栗山四郎右衛門・母里太兵衛・井上九郎右衛門・黒田凶書助ら後に黒田八虎と呼ばれる大身の家臣たちである。黒田家の主力は長政について関ヶ原合戦に臨んだとされているが、重臣の多くは如水とともに出陣し、石垣原合戦の際には実相寺山周辺に布陣した。



栗山四郎右衛門
(福岡市博物館蔵)



母里太兵衛
(福岡市博物館蔵)

吉弘統幸と石垣原合戦

吉弘統幸は、父鎮信が耳川の戦い（天正6年：1578）で討死すると家督を継ぎ、衰退していく大友家を一貫して支え続けた。

天正14年（1586）の豊薩合戦の際には、少数の兵にて祇園河原（大分市）に布陣し、戸次川合戦の勝利で勢いに乗る島津家久の軍勢を、一時的ではあるが足止めさせた。また、朝鮮出兵時には、志賀親善らの撤退論に反対し、小西勢を救援すべきと唱えたと伝えられている（大分県1981）。

大友義統が旧領回復を目指し豊後へ向かった際には、徳川方へ味方するよう説得するものの叶えられず、不利と知りつつ旧主君に従った。合戦の際には、黒田家の重臣井上九郎右衛門との鎧による一騎打ちが行われたとされ『黒田家譜』では、その様子を以下のように伝えている。

両人は先年よりしたしく馴近付たる事なれば、久しくて参り合たりとて、しばし物語しけるが、いざや花やかに勝負を決せんと、互に云合せて、面もふらず戦ひける。

九郎右衛門は勝れたる勇士なりしが、たけひきく力劣りけり。吉弘ハ聞こゆる大力にて、ややもすれば井上ハたたき付られ、あやうく見えし處に、九郎右衛門が運やつよかりけん。吉弘がつきける鎧、九郎右衛門が鎧の胸板に幾度もあたりて、鎧の毛處々切るるはかりなれども、皆鎧の上なれば通らず。井上が鎧、吉弘が内胄に突入けるに、十文字の横手にて、左の頬先をしたたかにかくる。

加兵衛ハ胄の緒きれ、かぶと顔にかかりて目を覆へば、鎧をもつてみだりに打払ひ、後へ退ける。吉弘が鎧を引とる時、左の腋の下具足のはつれに、襷の青く見えけるを、井上よき透間よと思ひ、鎧にて突しかは、あやまたす左の腋の下に深く突入たり。

吉弘心はたけしといへとも、今朝よりの合戦につよくはたらき、すべて敵を討取事二十三人なりしかは、戦ひつかれ、其上両所深手を負、殊に腋の下の疵いた手なれば、忽によはりて戦ふ事あたハす。

引用文献 川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『新訂黒田家譜』文献出版1983

※『黒田家譜』では、大友家の豊後除国後、吉弘統幸は一時期黒田如水に招かれ、井上九郎右衛門の領地に逗留していたと伝えている。



吉弘統幸（宝泉寺蔵）



吉弘統幸が合戦の際に用いたと伝えられる旗指物（八幡朝見神社蔵）



吉弘統幸を祀る吉弘神社



吉弘統幸の菩提寺宝泉寺



井上九郎右衛門
（福岡市博物館蔵）

井上九郎右衛門（1554-1634）

福岡藩の貝原益軒が藩命により編纂した『黒田家臣伝』では、その筆頭に井上九郎右衛門の事績が記されている。これによると「行儀すぐれ武勇の心懸深かりけり」とその人物像が伝えられ、如水とともに各地を転戦したが、その名を高めたのが石垣原合戦での働きで「慶長五年、如水に従て豊後に赴き、大友義統の先手吉弘加兵衛尉統幸と鎧を合て打勝、付従ひし軍勢を追散し、其名天下に高し」と紹介されている。

黒田家の筑前入国後は、隣国豊前の細川家との関係が、年貢収納問題で悪化し、その要衝の地である黒崎城を任され、1万6千石を与えられた。

引用文献 貝原益軒編著『黒田家譜』『黒田家臣伝』歴史図書出版1980

『鶴見七湯廻記』に描かれた石垣原合戦

『鶴見七湯廻記』は、豊後森藩の藩主久留島通嘉が、鶴見村の照湯に温泉場を設け、その繁盛するにおよび鶴見村内の七湯の由来と、村内の名所・旧跡特産物を紹介するため、藩の寺社奉行伊島重枝に文を、江川吉貞に風景を描かせたものである。

石垣原合戦に関するものとしては絵図は「吉弘統幸古墳」「鶴見原古戦場」「大友義統腰懸石」「黒田孝高腰懸石」などがあり、説明文としては「吉弘統幸古墳のこと」「鶴見原古戦場并大友黒田両将腰懸石の事」などがある。江戸時代後期の別府の風景や風土を知る上で貴重な資料である。



「吉弘統幸古墳」『鶴見七湯廻記』（大分県立歴史博物館蔵）

吉弘統幸古墳のこと

鶴見と石垣両村の境なる往還の西のかた 鶴見村の内なる小林の中に吉弘嘉兵衛統幸の墓あり
 統幸は大友の重臣にして智勇兼備の人なり 義統防州より豊後に渡海して御領を復さんと計りに
 いまだ時至らずと諫を入たれとも用ひず 終に小郡より発し濱脇にいたり鶴見原の合戦有し也
 時は慶長五年九月十三日の合戦に此所にて戦死したり 黒田の臣後藤太郎介と云もの種子か島の
 鉄砲にて統幸が弓手の脇腹をうちぬく 時に小栗次右衛門首を取たりと云 戦死の所は屋形石の所
 なるべし

法号は統雲院殿傑勝運英大居士と有 石の小室に位牌おさめ有 傍に丈くらべ石と云て高七尺ばかりの立石有 又下馬松と云て此森の中なる古松の枝東のかたに長くさし出て 従来の人ここにて下馬せざれば通がたし 依て下馬松の名此所に 寛政の末枯て今はなしといへども いつとなく地名のごとくなりて今も此所を下馬松と人皆云る事也

（『鶴見七湯廻記 伊島重枝』 訳：入江秀利）



「鶴見原古戦場」『鶴見七湯廻記』(大分県立歴史博物館蔵)



「黒田孝高腰懸石」『鶴見七湯廻記』(大分県立歴史博物館蔵)



「大友屋形腰懸石」『鶴見七湯廻記』(大分県立歴史博物館蔵)

鶴見原古戦場并大友黒田両将腰懸石の事

慶長五年の秋大友義統周防國小郡より出船して 九月九日當國濱脇に着船有て立石村に移て陣を居られたり この陣所此村の庄官の宅地となりて 近き年頃までそのときの本陣を居宅の座敷として存ぜしが 今は新宅に建替てなし

初義統立石に陣を居諸方に廻文をなしけるに 恩顧のものども近隣より集りてやがて三千餘騎となりぬ 其頃杵築の城には細川候の城代として家臣松井佐渡守・有吉四郎左衛門居城す大友かたより杵築の城を責て利あらずして立石に引取 松井・有吉軍を出して鶴見原に來り實相寺山に屯す 此よし中津黒田如水聞て早速軍勢を出す 先鋒井上九郎右衛門鶴見にきたりて松井・有吉と同陣す

九月十三日合戦数度に及ぶ はじめは大友勢強ふして中津勢三度まで取り 戦場は立石と實相寺山のあいだなる廣原也 此野全鶴見村の地面也といへども 古くより鶴見山河原奥より出水の防たる石堤数ヶ所有によりて也 此所を石垣原といへり 初十三日におよびて如水國東より石垣原に出て此實相寺山に陣を居られたり 此日の合戦討死大友かたに精兵九十騎雜兵百五十餘 中津・杵築の勢八十餘うち死すと云 吉弘嘉兵衛統幸も此日の合戦にうち死し 義統も終に如水にくだりぬと云 此廣原に立石村の本陣より出張くて大友義統軍配せしとき腰懸たりしと云石有 今やかた石と云 又黒田孝高か腰懸石と云も有て 是は大友の本陣を居たりし立石村にあり ふたつながら動なき昔のかたみ爰に残れるもの也けりと 則図にも出したりけらし

(『鶴見七湯廻記 伊島重枝』 訳：入江秀利)

古絵図で見る石垣原合戦



◀大友方陣所付近の拡大図

『石垣原合戦絵図』は、江戸時代に描かれた古戦場図で、右下には黒田・松井勢が布陣した実相寺山・加来殿山が描かれている。左側には大友勢が布陣した立石の陣が描かれ、「坂本吉弘陣所」「小屋園大友本陣」「御堂原宗像氏陣所」と記載がある。



▲石垣原合戦絵図 江戸時代 大分大学学術情報拠点蔵



▲石垣原戦陣図 江戸時代 福岡市博物館蔵

この書状は、石垣原にて激しい戦いが行われた慶長5年9月13日に大友義統が吉良三右衛門宛に宛てた書状で、合戦の際の活躍を讃え、後に恩賞を与える旨を書きとめている。



▲大友宗巖（義統）書状（吉良三右衛門宛）
慶長5年（1600）9月13日 福岡市立博物館蔵

上記の書状と一緒に保管されていた古戦場図。大友方の軍勢については「大友人数七百五十」とあり、石垣原合戦における大友方の人数については不明な点が多い中で、興味深い資料である。

古写真で見る石垣原合戦

昭和十四年（1939） 石垣原古戦場付近航空写真（国土地理院 ※一部加工・加筆



大友屋形石（昭和45年頃）『鶴見七湯廻記』にも描かれていた（15頁参照）



七ツ石（昭和四十五年頃）



宗像掃部陣所跡付近から実相寺山を望む



宗像掃部陣所跡から堀田温泉へと向かう道端にあった「鐘掛の松」（昭和四十五年頃）

踊り継がれる石垣原合戦（ヤッチキ）

『ヤッチキ』（福田正採譜・福田正編曲 昭和41年）

ハアーヤッチキドッコイドッコイナ

(一) さても大友義統様は、故郷豊後の速見を指して

ハアーヤッチキドッコイドッコイナ

(二) 帰り給うや立石城に、しばし足をも名もとどめける

ハアーヤッチキドッコイドッコイナ

(三) かくと聞くより豊前の国の、中津城主は黒田の如水

ハアーヤッチキドッコイドッコイナ

(四) 悪に長ぜし大友屋形、退治せんとして乗り入れ給う

ハアーヤッチキドッコイドッコイナ

(五) 豊後横灘鶴見のうちに、山を小楯に陣取り給う

ハアーヤッチキドッコイドッコイナ

(六) 都合其勢八千余騎の、八千三五の二手に分かれ

ハアーヤッチキドッコイドッコイナ

(七) 裏と表にたち分れ行く、頃は慶長五年の九月

ハアーヤッチキドッコイドッコイナ

(八) 菊の花時十三日の、朝の卯の刻一番揃い

ハアーヤッチキドッコイドッコイナ

(九) 続く踊りは別府のはやし、三味や太鼓に銭ばち持って

ハアーヤッチキドッコイドッコイナ

(十) サアサー輪になれ別府の踊り、後が続けば皆続きます

ハアーヤッチキドッコイドッコイナ



引用・参考文献

- 垣本言雄校訂 1938 『大分縣郷土史料集成下巻』 大分縣郷土史料刊行會
安部巖編 1970 『郷土叢書41 豊後石垣原軍記大成』
大分県教育委員会編 1981 『大分縣史料(34) 第二部補遺(6) 大友家文書録(四)』
川添昭二・福岡県古文書を読む会校訂 1983 『新訂黒田家譜第一巻』 文献出版
細川護貞監修 1988 『出水叢書2 綿考輯録 第二巻忠興公(上)』 出水神社
橋本操六 1986 「関ヶ原合戦前後の豊後諸大名—『清正勲績考』を中心に—」
『大分縣地方史第122号』 大分県地方史研究会
安部和也 1992 「石垣原合戦日記—古屋家文書—」 『別府史談6』 別府史談会
林千寿編 1997 『松井文庫所蔵古文書調査報告書 二』 八代市立博物館未来の森ミュージアム
林千寿編 1998 『松井文庫所蔵古文書調査報告書 三』 八代市立博物館未来の森ミュージアム
林千寿編 1998 『関ヶ原合戦と九州の武将たち』 八代市立博物館未来の森ミュージアム
入江秀利 1999 「書簡が語る真相 松井・大友の立石合戦」 『別府史談13』 別府史談会
入江秀利 1999 「資料 松井家譜」 『別府史談13』 別府史談会
三重野勝人 2002 「石垣原合戦の実像を探る」
『大分縣地方史第186号』 大分県地方史研究会
笠谷和比古 2008 『関ヶ原合戦—家康の戦略と幕藩体制—』 講談社学術文庫
白峰旬 2011a 「慶長5年の九州における黒田如水・加藤清正の軍事行動(攻城戦と城受け取り)に
ついて—関ヶ原の戦いに関する私戦復活の事例研究(その2)—」
『史学論叢第41号』 別府大学史学研究会
白峰旬 2011b 『新「関ヶ原合戦」論 定説を覆す史上最大の戦いの真実』 新人物往来社

協力機関

財団法人松井文庫 八代市立博物館未来の森ミュージアム 大分県立歴史博物館 福岡市博物館
国立国会図書館 大分大学学術情報拠点 宝泉寺 八幡朝見神社 吉弘神社

執筆者

別府市教育庁生涯学習課 秦 広之

べっぷの文化財 No.44

—石垣原合戦—

平成26年3月

発行 別府市教育委員会
編集 別府市教育委員会
別府市文化財保護審議会
印刷 大野印刷株式会社

